

## 平成 23 年度第 2 回市民協働推進委員会会議概要

日 時 : 平成 23 年 5 月 29 日 ( 日 ) 13:30 ~ 19:00  
会 場 : 市役所議会棟第 4 委員会室  
出席委員 : 名和田委員長、浅野副委員長、長谷川委員、寺田委員、木田川委員、伊藤委員、  
小林委員、渡辺委員、角田委員  
事務局職員 : 有澤市民部長、小林自治人権推進課長、江波戸主幹、近田主査、石原主査補、  
小田主査補、橋本主任主事、高柳主事  
傍聴者 : なし

### 議題

- ( 1 ) 市民協働事業 ( 市民提案型 ) プレゼンテーション及び質疑
- ( 2 ) 市民協働事業 ( 市民提案型 ) の評価及び意見調整について

#### 1. 開会

事務局：長時間にわたってご審議いただき、市民協働の趣旨をご勘案の上審議いただきたい。

#### 2. 委員長挨拶

委員長：市民協働事業の審査・提案はいくつかの自治会で経験があるが、土地勘が無いと非常にやりにくいと事前審査の時に感じた。委員の発言から学びながら慣れて行きたい。

事務局：会議の進行は引き続き名和田委員長に議長をやっていただく。

委員長：会議の前に何点か確認させていただく。まず一点目。本日の審議は、事業の評価・意見調整の部分を除いて公開。二点目、議事の順番を一部変更し、公開部分を前半にまとめた。三点目、議事の ( 1 ) 市民協働事業 ( 市民提案型 ) プレゼンテーションおよび質疑については、一団体当たり説明 10 分、質疑 15 分の合計 25 分を単位として進めていく。タイムキーパーが時間をお知らせする。説明は公平性の観点から 10 分を厳守できても質疑の 15 分はなかなか厳守出来ないということがあるかもしれないが、なるべく守っていききたい。市民協働事業の採点方法については、評価項目ごとに事業別評価表に記入いただく。0 点の項目がある場合はコメント欄に理由を付記していただく。記入いただいた事業別評価表の回収は ( 4 ) その他が終わった時点で事務局が回収し、集計作業を行う。集計結果については ( 2 ) 評価及び意見調整で使用する。意見がある場合は挙手してもらう。会議の成立について。本日の出席委員は 9 人。条例の施行規則 1

8条の規定により、過半数が出席している為、本会議は成立している。

3.

(1) 市民協働事業(市民提案型)プレゼンテーション及び質疑

1 こどものあしたプロジェクト

こども：私達の団体は、4年目を迎える。4年間、演劇・オペラ等を見せることによって子ども達の情感を育てようという活動を行ってきた。音楽ホールで劇団等と呼んでいる。最近の子どもたちを見ていると、なかなか部活動等で時間が埋まり、本当の意味での演劇を見ていない。子どもたちが芸術に触れることが非常に少ないと思い、バーチャルな世界から現実世界に引っ張り出して感動を与えようということでこのような活動を行っている。したがって、事業の名称は「文化を通して子どもが生き生きと育つまちづくり」。子ども達の心の活性化、家庭における文化力の向上、子どもへの関心の高まり、文化と子どもが結ぶ多様な市民の繋がりといったものを期待しての取り組みであるのご理解いただきたい。

今年は、命の尊さがテーマである「まぬけなりゅうの話」。かわせみ座という劇団を呼ぶ。その他に、子供たちが実際に佐倉市の中でどういった観賞状況にあるのか、調査をしてみたいと思っている。各学校でヒアリングを行ない、状況の統計をとりながら、報告を市に出したいと思っている。全体のスケジュールとして、4月から実行委員会としてはスタートしているが、実際の講演は11月13日を予定している。マリオネットという特殊性から鑑みて、音楽ホールを満席にして見せると言うのは難しい。そこで、身近にマリオネットの動き、美しさを見てもらうために、2回に分けて講演することを計画している。その他に、11月までに子供達に演劇に関心を持たせるため、ワークショップを2回行うことにしている。7月にはかわせみ座のワークショップ実施。演劇に関するワークショップを行う。8月中旬には命のワークショップとして、早稲田大学の助教の方に講演していただく。また、ワークショップではないが、10月上旬にバス研修と言う形で印旛沼の竜神伝説に関するお寺巡りを子供たちと行う。バスの中で伝説の語りをやってもらうという計画をしている。バスの中で話してもらうのは、市民カレッジの「さくらっ古」の講師の方をお願いしようと思っている。我々の目的と成果をどのように判定するかについて。子供たちが見てもらうことが一番大事なので、小さな子供を持つ家庭が参加者の65%を占めるようにしたい。また、障害者の方を20人、1人親家庭の方々を40人以上集めたい。その他に、今年は3月11日に被災された方々を併せてご招待できればと思っている。子供たちの本当の意味での観賞力、文化力の向上を図るということで計画している。なお、学校におけるアンケートについては、黒木から説明する。

こども：今年初めてヒアリングを行う。いい舞台を見て、会場がシーンとなったり、涙ぐ

んだりという場面を沢山見てきた。年一度でも感動を佐倉の方々に届けたいと努力している。沢山の子供たちに効率よく見てもらうためには、やはり学校公演が一番。学校がどれだけ講演を行っている数を正確に把握しえていないので、今回全ての小中学校にヒアリングし、その結果を元に今後の活動につなげていきたいと考えている。

(質疑)

委員：マリオネットの講演を行うとのことだが、会場を満席に出来ないのは何故か。

こども：糸の操り人形なので、後ろの席からだ小さくて見えない。前の350人程度できちんと見えるようにしたい。

委員：公演を実際に学校でやるのは少なそうということになった場合、こどものあしたプロジェクトとして、どのような構想があるのか。

こども：構想は無いが、学校に働きかけて、授業の中で公演が出来ればと思っている。

委員長：文化的公演か。

こども：演劇に限らず、小学校全体で文化的な公演を行いたい。

こども：文科省から助成も出ているので、情報収集し、出来るなら学校に働きかけてやっていきたいと思っている。

委員：事務的なことだが、支出の部の中に一人親家庭の招待チケット代が入っている。チケット代と言うのはなぜ支出に計上されるのか。それ以外のチケット代は謝礼金に入っているわけだと思うが。

こども：こちらで立て替える形にし、ひとり親家庭を招待するという形にしている。

委員長：劇団に渡すのなら、公演料の項目に入るのではないか、という質問。謝礼金として劇団に渡している以外に、ひとり親家庭用の代金を別枠で劇団に渡しているということか。

こども：チケット代はチケット代として渡している。我々で立て替えるという形なので、このように記載している。

委員長：劇団から見ると、謝礼金とチケット代が来て、2通りの収入があるように見える。

委員：チケット代が劇団に全部行くのならわかるのだが、収入欄を見ると事業収入の項目に入っている。事業収入の中に立て替えた105,000円はここに入らなければいけないはずなのに、入っていないのが疑問。

委員長：予算の立て方がやや分かりづらい。

子ども：明確にすれば、支出金として書くということになる。

委員：収入にチケット代が入るのであれば収入にも入れなければならないのではないかと。事業収入が増えるはず。

副委員長：2本立てにしているとしてもおかしいのは、大人が2,500円で、ひとり親家庭が3,000円。その中には寄付が入っているのに、自分で立て替えた分も寄付で立て替えるということか。この部分を細かく聞いてもなかなか進展しないと思うが。

委員長：この件は、この事業がもし通過した場合、改めてもう一度きちんと説明してもらうということ。

委員：前回ミュージカル「アトム」をやられていたが、全地域と言うことだが、実際に参加された方の割合はどうなのか。毎回同じ方なのか。

子ども：地域ははっきりとはわからないが、かなり広範囲にわたっている。ミュージカル「アトム」でアンケートをとった限りでは、小学生から大人まで完全に網羅されていたことが分かっていた。

委員長：アンケートに地区名も入れてもらいたかった。あまり細かく聞くのもまずいかもしれないが、ご検討いただきたい。

委員：とりあえず調べるとのことだが、青菅小学校では廃品回収のお金が潤沢で毎年演劇を呼んでいる。お金のかかることで、先程助成の紹介をするという話があったが、学校によって事情が異なるのだと思う。この劇団は1公演いくらかかる等の情報提供だったら、特にヒアリングは必要ないのではないかと。命のワークショップについて、講師による研修とのことだが、もう少し詳しく教えてほしい。

こども：ヒアリングに関しては、学校によってはやっていない所もあると聞いていて、確認したいと思っていた。きちんとした論法が必要なので、正確な情報を知ってから、こちらが出来ること、市が出来ること等を判断して、今後の活動計画の材料にしたいと思っている。命のワークショップについて。早稲田大学の子どもの人権を専門にしている阿部先生のワークショップ。わかりやすい例に触れながら、子どもたちを動かしながら考えてもらい、体感してもらうのがとても上手な先生。

委員：今更だがワークとはなんなのか、わかりやすい言葉に変えられないか。

こども：子供たちに伝えたいことを、言うだけではなくて、子どもたち自身に考えるきっかけを与えたり、コミュニケーションや体を動かして身につけていくということ。

委員長：小さい申請書だが、わかりにくいことについては具体的に説明した方が良いと思う。

こども：体験講習と言い換えられる。

委員：年間スケジュールの中に、佐倉こどもステーション事務所内部で行うという記述があるが、佐倉こどもステーションと一緒に活動しているということか。

こども：佐倉こどもステーションは我々の一メンバー。

委員：協賛、寄付のキャンペーンとは具体的にどんなことを行っているのか。

こども：我々が知っている所を訪ね、お願いするということしかない。人脈を使って、色々な商店などを訪ね、キャンペーンしていくということ。

委員：研修費3,500円×10人とあり、事業計画書の5月の研修参加とのことだが、何のための研修なのか。

こども：「まぬけなりゅうの話」を実際に見に行った。見ることにより、以後の活動に資するということと、宣伝効果等も変わってくるため。

特定非営利活動法人佐倉一里塚

一里塚：なぜ佐藤泰然なのか話をさせていただく。一点目として、直筆の手紙を入手し

たのが大きな原因。二点目は、400年記念事業にうまく活用できないかと思ったこと。三点目に、順天堂大学、順天堂病院の発祥の地が佐倉であること、創設したのが佐藤泰然であることはほとんど知られていないので、周知に努めたいと思ったこと。四点目として、順天堂記念館の来場者数を増やすためのきっかけにしたいというのも原因。現在、一里塚はガイドを中心に行っている。年間1,000人くらいを案内している。展示について、フラワーフォト展をやっているほか、秋祭り写真展、土井利勝写真展も行った。

まちづくりパートナーシップについて。地元との関係で言うと、時代祭り実行委員会に入って協力しているほか、秋祭りのオープニングセレモニーに出席している。また、私達が提唱して大きな広がりを見せているのが、城下町雛めぐり。昨年度40店舗まで広がった。今後のまちづくりのきっかけになると思っている。行政との協力関係について。お囃子館の指定管理をしているため産業振興課とかかわりがある他、文化課からの依頼を受け古民家のガイドを行っている。全国町並み保存連盟の総会が佐倉で行われたが、市の職員も来てもらった。

順天堂について。当時の建物が現存し、沢山のものが残っているにもかかわらず、来場者が少ない。観光資源として十分に生かされていない。順天堂を知ってもらうことが第一歩だと考えた。展示、ガイドブックの発行、ガイド付き見学会を実施する。順天堂の理解を深めるために、佐倉町並み情報館での展示と、学習の場として歴史的資産を活用する。佐倉の歴史に関する学習の機会とし、興味を深めていく。市民から発信することで、市民が共感を得、学習意欲が生まれることを期待している。順天堂を支える人や、市民研究者等の人材育成を目指す。

ガイドブックの説明をする。三つの事業を行うことで行政に協力いただきたいのは、広報や後援のお願い、写真の使用許可、資料提供、情報提供、専門的アドバイス等を行って欲しい。また、ガイドブックの設置箇所の協力もお願いしたい。

委員：収支予算書の旅費の所で、合計額15,000円の所が、足し算すると15,000円にならない。交通費の所も間違いがある。合計額も変わって来ると思う。また、何のためにこういったことを行うのか、一言で簡単に説明いただきたい。

一里塚：我々は総合的な街づくりを目指している。武家屋敷、堀田邸、順天堂記念館がリンクしていない。観光客の方は大体歴博だけ見て帰ってしまっている。城下町を魅力ある形で復興しないとさくらの生きる道が弱いと思っている。ルートを順天堂まで引っ張ってくれば、観光客が来るのではないかと思う。市内にお金を落としてくれるような仕組みを作りたいと思っている。

委員：事業費の予算の8割が、ガイドブックを作る為の予算。はたして役立つものなのか。どのように使っていくのか。具体策がなかなか見えてこない。

一里塚：事業期間中に200冊販売し、その後平成23年度事業として東京と大磯のガイドツアーで100冊は売ろうと思っている。次の年度も300冊売りたいと思っている。

委員長：何の為というのは私も質問したかったこと。

委員：売り上げたお金はどうなるのか気になった。質問したいのは、展示をするとのことだが、まず佐倉市民に泰然を知ってもらう為には、普段市民が集まる所で転々とやった方が良いと思う。来るお客にPRしても間口が広がらない。東京などで佐倉をPRするとすれば、順天堂大学、順天堂病院のルートを積極的に使うスタンス、打って出るスタンスでないとなかなか広がらないと思う。ある佐倉の歴史の冊子を見た知り合いは、とても鋭い反応を示していた。PRの仕方によっては訴えるものがあるという気はしている。目的は理解できるが、PR手段としては少し弱いと思う。

一里塚：ガイドブックの販売に重点を置くと、PRとしては難しい。一定程度の所で販売の協力をいただきたいが、少なくとも、公民館等にポスターやチラシを貼って誘導を図ることを積極的に行いたい。ただ、新町を中心とした城下町が非常に沈んでいる。ノグチヤも6月いっぱい閉店する。あそこを中心に盛り上げていきたい。順天堂関連の品々は歴博に集中している。現状で借りられなかったので、有るものを使ってパネル展示でアピールしていきたいと思っている。

委員：外部の人を呼び込むと考えると、佐倉は歴史があふれていると思うが、交通手段や飲食店の関係もあり、結局歴博をみて、川村美術館と成田に行くということになってしまう。観光資源として外部の人を呼ぶとなると難しいのでは。

一里塚：全国町並み保存連盟の際に、こちらから武家屋敷観光をおすすめしたが、全国から見るとやはり順天堂記念館を一度は見たいという。一日さくらで過ごすというのは難しい状況があるが、歴博に来た流れを順天堂に誘導していく。順天堂まで観光エリアと位置づけ、長期にわたって取り組みたいと思っている。

委員：確か佐倉には他にもガイドボランティアがあったと思うが、そこの関係は。有料でガイドされているが、ガイドボランティアは無料だったと思うが。

一里塚：ガイド団体は大きなものがいくつかある。文化財ボランティアガイドは、順天堂については薄い。公園緑地課系の団体は、城址公園がつよい。産業振興課はインタープリターとして屋形船をやっている。また、シルバー人材センターが有料でガイドを行っ

ている。我々は、今まで外からガイドして、時間がかかるため中でガイドすることは無かった。棲み分けをきちっとしながらやっていきたいと思っている。なお、見学会については、保険料、入館料を料金に入れたいと思っている。

委員：スケジュールの中で、広報活動をもっと広くやった方が良いのではないか。また、観光協会と連携するのはどうか。アミーゴしずとの連携も出来たら面白い。ガイドについて、保険料は入っているか。

一里塚：入っている。広報の位置づけが弱かったようなので、外部に広がるように努力したい。

委員：ネットやツイッター等での展開は。

一里塚：行う予定。ホームページも持っているので、チラシの他にも頻繁にアップデートしていきたい。

#### NPO 佐倉こどもステーション

こどもステーション：目的及び効果。乳幼児とのふれあいや、学習の場を作る。異年齢との交流を通して、地域の繋がりやの輪を広げる。地域の人間関係を深め、地域で子どもを育てる大切さを学ぶ。1回目は保健士に依る乳幼児についての講座、ふれあい遊び。2回目はデイキャンプ。3回目は乳幼児親子とふれあいデイキャンプ。4回目は講座、裏山教室での遊びの実践。事業期間は平成23年7月から8月28日まで。助成金は70,880円交付していただきたい。解決したい課題。次代を担う若い世代が子供を産むこと、育てることの意義を理解し、親となることの意識付けを行う。課題地域は佐倉市全般。過去の保育ボランティアの実績から佐倉市次世代育成支援計画から把握した。解決方法として、乳幼児と触れ合う際の注意点などを学び、実際に触れ合う。食事を作ったり遊んだりしながら距離を縮める。風の村の裏山教室で事業を実施する。達成したい成果として、本来より多く参加を期待したいところだが、きめ細やかな指導をするため、市内小中校生20人を参加枠にし、20組の乳幼児の親子がデイキャンプに参加する。今回の取り組みをきっかけとして、独自に子どもたちとの交流を継続していく。一例として、佐倉こどもステーションの事務所内を開放し、異年齢交流を広げていく環境を用意している。去年の公園調査では、調査にとどまることなく実際に公園に集える環境作りに取り組んできた。ボランティア意識の高まりも育てていきたい。今回の助成で、受講料を最低限に抑えたいと思っている。



委員：支出の部で、消耗品の内容が一致しないが。

こどもステーション：全戸配布をさせていただくチラシの印刷代が抜けていた。

委員：成果の中で小中校生20名、きめ細かくやりたいとのことだが、多数来てしまった場合はどのように振り分けるのか。

こどもステーション：うれしい悲鳴として、限度なく受け入れたいとは思っている。しかし、過去の実績からすると、沢山の参加申し込みがあるわけではなく、確保に苦慮する所。

委員：集める時にどのように集めるのか。

委員長：それは私も質問したい。特に中高生をどのように集めるのか。

こどもステーション：0歳から18歳までの会員がいるので、そこから集めるのは簡単だが、我々に属していない人達にも参加して欲しい。チラシを全戸配布するほか、佐倉西高校、佐倉東高校に直接先生にお願いしたり、各中学校とも付き合いがあるので、直接足を運んで、参加者を募りたいと思っている。

委員：こどもステーションさんは大きな団体なので、申請事業は大きなスケジュールの一つの事業と言うことだと思う。そうすると、会員はこの事業について知っていることになる。参加者20名を募集しているということについて、団体の人にアドバンテージはあるか。

こどもステーション：チラシ配布も同時期にしようと思っているので、団体にアドバンテージがあるわけではない。

委員：チラシ印刷代は何枚か。

こどもステーション：1万枚。小学校4年生以上を対象に全戸配布する。

委員：異年代の交流はとても大事だが、20名はとても少ないという気がする。実際13人しか集まっていないが、その辺の努力もしようがあるのではないか。それ以上集まったらうれしいとお話だった。もっと大きな事業に出来ると思う。

こどもステーション：2007年以降、この講座をやっていなかった。継続していたら違っていたかもしれない。私達の会が佐倉市で周知されているのかどうかというのもある。本当は、30人くらいは受け入れて集めたいと思っている。

委員長：数からして、数年間は最低取り組んでいくのか。

こどもステーション：これをきっかけに継続していきたいと思っている。

副委員長：名称だが、夏休み保育ボランティア講座。どこがボランティアなのか。保育体験講座なら応募しようという気も起きるかもしれないが、募集の時の名称を考えた方が良いのでは。

委員：どこがボランティアなのかわからなくて、誰の為の事業なのかよくわからない。実際の子供が対象なのか。小学生の子供達に保育するノウハウをあたえることが目的なのか。デイキャンプ等の遊びの機会が多くて、何を目的にしているのかよくわからない。

こどもステーション：ノウハウと言うよりは、異年齢で交流機会が少ないので、場を提供したいというのが比重としては大きい。

副委員長：そうなるとタイトルと合致していない。

こどもステーション：実践として、キャンプで触れ合うことにより、学んだことをボランティアに生かしていくという流れ。ボランティアと名付けているのは、ただの遊びではなく、講座で学んだことを、面倒を見るんだという責任感を持って触れ合って欲しいという意味から。名前の方はまた再検討していきたい。

副委員長：20組の乳幼児と言うのは。

こどもステーション：会員でも良いが、一応チラシは作って公民館などには置く。

副委員長：20名にこだわるのは、公益性の部分にかかわるから。

委員長：会員外の人にも打って出るということがはっきりしていないと。

こどもステーション：それはもちろんはっきりさせる。

委員：乳幼児も募集するのかと思っていた。スタッフである小中学生など2時間程度の講習で保育するというのはすごく危ないのではないか。保育に慣れていない人たちが料理し、保育するのは危ないのでは。外で特別におむつを替える場所も無い。

こどもステーション：大人のスタッフを動員し、安全性への配慮していきたい。

委員長：講座参加者がデイキャンプに参加するというのは、今の回答で初めて知った。この用紙ではその点は明確ではない。先の意見のようなリスクがあるため、違うと思っていた。

こどもステーション：配布した冊子にイベントの報告書がある。

委員：雨が降ったらどうするのか。

こどもステーション：外ではなく、施設の中でやることになるので、考えて行きたい。

委員：金額について。会費を最低限に抑えるとのことだが、これは小中学生すべて同額で徴収するということがか。

こどもステーション：デイキャンプ含め、1,000円。

#### 任意団体「NPO 子どものまち」

子どものまち：昨年度助成いただいて、事業を進めてきた。昨年度の事業を聞いてもらい、今年度の取り組みの話をしたい。昨年度7月8日からえんがわカフェと言うものを開催した。地域の方々が自然な形で入って来られるような、多世代の交流の広場を目指した。オープニングの際は、紙芝居、読み聞かせを含めて、大勢の人を集めて盛大に行った。夏休み中は、子供達は良く通ってくる子たち中心にまた違った雰囲気を作り出すことが出来た。秋になってから、少しずつお母さんの話を聞きながら事業を進めてきた。ご要望を聞きながら中身の変更を加え、事業を進めた。市の職員を招いて佐倉市の子育て支援について話をしてもらった他、市民協働推進研修として子どもたちと遊んだり紙芝居をやってもらったりした。南志津小学校から小学生が来て、研修場所に使っていただいたりした。子ども世代の家庭が中心なので、とちゅうから朝市カフェと言うことで広い世代との交流の場を設けている。当初の目標200人の所、339人という結果だった。今年度、引き続き多世代交流事業を広げて進めていきたい。

昨年度から事業の内容は変わらない。子育ての先輩が井戸端会議的な交流をすること

で悩みやストレスを解消できるのではないかと考えている。他世代交流広場づくり、えんがわサロン、朝市カフェを計画している。今回の特色は、スタッフのさらなるモチベーションを高めるため、またお母さん方に新しい情報をとりいれていただきたく、研修事業を追加させていただいた。お母さん業界新聞を発行されている主催者の方に来ていただく。今回の特徴は、ママズジャーナリストと言うことで、お母さんが情報誌を作成しているのが特徴。そのお母さん方と直接交流してきた。同じレベルの話が出来るのが特徴。直接交流できる、お母さん方との交流をやっていきたいと思っている。また、主催者の方の取り組みとしてお爺さんが子どもの世話をするという取り組みを行っている。中志津のお爺さん方は元気なので、そちらの方々に周知を図りたい。もうひとつ、ママズカフェとして、最近働くだけでなく子どもたちの遊ぶスペースも作っているという活動も広がっているようなので、こちらも共有していきたい。

委員：素朴な疑問。過去の経験として、乳幼児を抱えた方のストレス解消として、井戸端会議の中に、乳幼児を持つ家庭が入ってきたことがあるか。過去の経験としてはどうだったのか。

子どものまち：状況は反対。シニアの方々がいる中に若い方が入っていくのではなく、若いお母さん方がいる所とシニアの方々、地域の人々をどうつなぐかを考えている。イベント等で一緒になるのは、他の事業でも行っている。クリスマスパーティーではオカリナを吹いているおじいちゃんおばあちゃんと一緒に交流する等。現状では、入りやすいかと言えば、入りにくい。知り合いが増えるかどうかなので、やはり地域でやっているの、地域の方との交流をどのように増やせるかが重要。1年や2年では出来ないの、長い目で見なければならぬ。民生委員の方も来たいということ伺っている。1人2人でも増やしていきたい。

委員：私は隣の志津地域だが、このことを知らなかった。公益と言うことになれば、中志津にこだわらなくても良いのではないかと。

子どものまち：第一に、中志津に事務所を展開している。そこを中心に子ども達の行事をやっているという歴史が10年ほどやっている。ここをモデルとしていただいて、見本として色々な地域に広げていただきたい。

委員長：関連して。子育て中の親と子供の交流の場と、他世代交流が一致すると本当に素晴らしいが、現実にはかなり違っていることが多い。この活動の果てにあるものは、コミュニティカフェ、もう一つは子育て広場。どちらを目指しているのか。

子どものまち：コミュニティカフェに行くにはママズカフェの事業性重視でいく傾向があり、その為にはお母さん方が意識を持って立ち上がるしかない。それはそれで良い。一方で私どもの事業として現実的に考えられるのは、子育て広場。これまで通り事業を継続していけば成り立つ。場所を持っているが、365日開くというのは難しい。週1日お母さんだけでカフェを開いてみたら、という夢は持っているが、強制する気は無い。

委員：研修費、多治見のママズカフェの視察の必要性についてもう少し説明を。対象事業費のほとんど半分なため。

子どものまち：私はママズカフェ自体は行ったことがあり、活動について見てきたことがある。お母さん方が幼い子供を抱えながらも、働くことが出来る職場があっても良いという理想がある。それがうまく取り組まれている、お母さん方が子供を抱えてやっているというのは、全国的に見ても優れた事例だと思っている。似たような問題を抱えているものを見てもしょうがないと思っている。成功例を見る必要がある。我々のスタッフの中には、コミュニティカフェを目指している人もいる。その人が立ち上がる可能性もあるし、そうなってくれば地域の可能性も広がるのでは。

委員：ママズカフェは近くにないのか。会費について。155,000円で、昨年度は25,000円だが、昨年度から増えたのか。

子どものまち：会からの補てんの分。団体の本会計から支出する額が増えたということ。

委員長：研修費が高いと、団体も身を切っているということ。

委員：達成しようとする成果の所に、他事業への参加の促進とあるが、具体的にはどのようなことを指すのか。

子どものまち：昨年、地域のフリーマーケットに参加した。今現在は商店街の行事が無いので進んでいないのだが、今年は商店街と一緒に何かやりたいと話しており、商店街からも声を掛けられているので、出来るのではないかと考えている。

委員：こられる親御さんはほとんど志津地区の方か。他地区からも来るのか。

子どものまち：基本的には乳母車を押してこられる範囲の方。千成から自転車で来る方もいる。やはり、問題を抱えているお母さん方が情報を仕入れにやってくる。

委員：昨年度の実績が 339 人。今年は開催回数が多いのに 300 人が目標だが、もう少し頑張っても良いかと。

子どものまち：非常に過小評価にしている。もう少し集まるかと。

副委員長：えんがわカフェが毎回 10 人程度だが、メンバーが固定的か、流動的か。

子どものまち：固定化してきている。ただ、今年度から幼稚園に入る児童もいるため、入れ替わりはある。地域が限られているので、固定化するのはやむを得ないのが内情。

副委員長：もう少し広がっていくと良い。事業が今後定着したら、外に出てこられない本当に問題を抱えている人の掘り起こしもできるのでは。

委員：昨年度の課題として、子育て親が地域の中孤立しているという課題が出ていたので、その解決方法がカフェだけでは弱いと感じる。もう少し工夫が必要なのでは。

子どものまち：事例として、あげるのは問題だが、問題を抱えた親も少なからずいる。我々が目指しているのは子育て支援ではない。親が自ら場を共有することで元気になっていただきたいというのが第一目標。今回問題を抱えていた親がカフェに来ることで、他の事業に参加したり他の場所に出かけたりという例が起きている。問題を抱えた方だけが集まると違った雰囲気の間になるが、普通の雰囲気の中で、スタッフが声を掛けて少しずつケアしていく方針。

委員長：朝市カフェと言う工夫も見られる。

委員：研修費が多いので助成金も多いのだと思うが、今後自立するための工夫について。

子どものまち：収入をどのように上げるかというのも課題。朝市カフェは地域の高齢者が多く参加し、収入源になっている。同時に、小物を作っている方がお店を開き、売り上げの 1 割をいただくという形で動いている。スタッフの交通費程度は出せるようにしていきたいと思っている。

副委員長：折角の協働なのにお金だけもらうのではなくて、子育ては行政も力を入れていく分野なので行政とのリンクも考えてほしい。

委員：えんがわサロンを 4 回開催されるとのことだが、藤本氏は 4 回来られるのか。

子どものまち：1回しか来ない。プログラムが決まっているのは1回のみ。お母さん方から何が今必要か聞きながら決めて行きたい。食べ物やアレルギーの話は必要だと感じている。専門の医師や栄養士などを呼びたい。聞きたいと言う人を呼ばないと、押し付けられるという感じがしてしまう。目標として、最低4回は開催したい。

委員：その時の経費は持ち出しになるのか。

子どものまち：来ていただく方に謝金が必要になれば、持ち出しになる。

委員：藤本氏が来る時に、市民25人程度の参加と言うのはもったいない感じがする。もっとたくさん集めて活動されないのか。

子どものまち：サポートセンターからの呼びかけがあったので、こちらから逆提案して、日付を11月20日にずらし、藤本氏の講演を多くの人に聞いてもらうように考えている。

委員：では中志津で行わないのか。

子どものまち：市民体育館を予定している。

#### ワーカーズコレクティブ風車

風車：事業の名称は引きこもりに関する講演会。目的は、引きこもりに対する理解を広め、偏見が是正され、当事者が生きやすくなること。親が引きこもりのメカニズムを理解することで、本人を受け入れやすくなり、本人の状態が好転すること。本人の状態を正確に理解することに依って、不当な抑圧を是正するのが狙い。講師による講演会と、体験者による体験談を話していただく。会場からの質問や相談に答えるという形。講演会では引きこもりのメカニズム、回復のメカニズムについて語っていただき、具体的な体験談を聞いて理解を深めるという流れ。解決したい課題について。本人や親達が強い自己否定感で非常に苦しんでいるという事例がある。親子関係がこじれ、暴力が出て親殺し、子殺しや自殺の例も数多く出ている。また、引きこもり是正を謳う悪徳業者により財産を失うということも起こってきている。何とかしなければならぬという切実な思いから今回の企画をした。

課題の把握方法について。我々は不登校・引きこもりの親の会を24年間実施してきた。その活動の中から見えたことから企画した。風車が様々なハンデと共にありのまま働ける職場と言うことで、テレビで取り上げられてから、50件問い合わせがあった。

三分の二がうつ病や引きこもりの患者の相談。

解決方法として、講演の中で、引きこもりの苦しみは個人の問題ではなく、それを生み出す世の中の問題と言うことを伝える。世の中の価値観が引きこもりを悪化させている。また、回復の為に寮生活をさせるというような業者についての問題点についても学ぶ。本人がなぜ引きこもらざるを得なかったかという気持ちを置き去りにされたまま動かされても回復は難しい。業者にかかる費用も非常に高いことが多いので、それも周知したい。ありのままの自分を肯定できるようになることが一番大事。それ無しでは真の解決は無い。困っている人の悩みに答えることもしていきたい。

達成したい成果について。参加した親が本人の状態を怠けや甘えではないと理解し、否定しなくなる。本人が少しでも動きやすくなることを目指している。風車に来てから少し動きやすくなって勤め始めたという方も2名いる。その人なりの自己実現・社会参加が出来るようになることを目指している。普通に働いている人にとっても、人間を労働力としてしか見ていない考え方について問いなおす機会にもなる。無理をしない生き方のヒントにもなる。社会全体へのメンタルヘルスにも寄与できると考えている。本人や親にとっては、市も差別していないということで、行政に対する信頼や、社会全体への信頼を取り戻すことの一助にもなる。その結果外出もしやすくなる。進め方として、若い体験者の方も一緒にミーティングで考えていき、学んでいく。当日はスタッフも入る。

委員：講演会の募集50名と言うことで、どういう方を対象にするのか。基本的には引きこもりの方の家族をターゲットにしているのか。

風車：親や、支える立場の人。

委員：一般の人に知ってもらおうという趣旨ではないのか。

風車：一般の関心のある方にも来ていただきたい。

委員長：ポスターを広範に宣伝されるのか。

風車：連携している関連団体に配布し、各団体に配ってもらう。

委員：謝礼が70,000円、旅費が100,000円。打ち合わせや当日会場への交通費ということで計上されているが、佐倉市以外の団体もいるのか。

風車：佐倉市以外のメンバーもいる。講師の方達も1,000円くらいかかる。多めに予算を



とり、実際は少なくなる予定。

委員：引きこもりはなかなか地域では見えないが、実際は多い。その引き出し方法は。

風車：公民館等になるべく置いてもらったり、貼らせてもらっている。広報にも協力をお願いする。

委員：突飛な意見かもしれないが、多くの業者がいるが、適切な公的な機関の窓口が無いのが問題。1回の講演会で家族が云々言うよりは、相談窓口として市と協働する等、日常的な対応をしないと、本当の狙った効果が出てこないのではないか。

委員長：1回の講演会では、というのは私も思った。この団体の問題に対する取り組みの一部ではないかと想像した。市への政策提案活動等、全体像があればかいつまんで説明してほしい。

風車：ワーカーズコレクティブ風車の前身団体と言うことで、登校拒否を考える会さくらと言う不登校・引きこもりの親の会を臼井公民館で立ち上げ、今年で24年目になる。その仲間同士で風車を立ち上げた。この講演会で広く知ってもらい、親の会へ繋げるという手順を考えている。その後ずっと支え合う体制に繋げようという考え。風車自体が相談活動をしている。県か市に政策提言も協働事業で出そうと思っている。

委員：その方が大事だと思う。他に適当な窓口がない。

風車：実際に協働で支える体制づくりというのは、今月県か市の方に申請を出そうと考えている。

委員：講演会を通じて入って来る方もいるのか。

風車：いる。

委員：支えにはなっているということがわかった。

委員：収支予算書の支出の所。ストップウォッチが2,000円。何に使うのか。

風車：時間を計る為に。

委員：引きこもりに関する情報の提供の機会にはなると思っている。中学校や高校に働きかけて、講演会を開催するというようなことは想定されているか。

風車：去年は不登校と引きこもりを考えるという題材にした。今年度は年齢の高い人を対象にしたいと思っている。

委員：チラシの配布先について。私は民生委員もやっているが、民生委員は引きこもりの家庭にはとても関心がある。引きこもりに対する関心が強い人々は多いはずなので、そういう人達へのチラシの配布、呼びかけを行って欲しい。

委員：中学校くらいまでは学校も先生方が何とかしようと努力するが、高校に入ると引きこもりになってしまったらどこの手も入らなくなってしまう。中学校までに何とかしなければならぬと考え、学校と連携している。そのような情報をもらえるとありがたい。

風車：中学校、高校、PTAにもチラシを配布する。

委員長：市との協働の意味として、市もその点について協力して手を貸していく。ここはこういう所に関心を持っているという情報を提供するような。

委員：相談事業も行うとのことだったが、セットで広報していくべき。むしろ、相談事業の方が講演会よりもその方が大事なのではないか。

風車：孤立している方が多いので、繋がるだけで全く変わって来る。繋げるという手段として講演会を開催する。

委員長：市の広報に載せる等の効果的な呼びかけの方法を、せっかく協働しているのだから、市に示していただく方が良い。事務局に言った方が良いのかもしれないが。

事務局：広報について。広報課より、今回の事業に対する連携支援ということで、広報さくらの1面を使って今年度の各採択事業団体の概要を掲載する予定。

委員：このプレゼンの資料を見ただけでは、講演会1回限りで引きこもり問題を解決できると思えなかった。説明を聞くと相談事業も行っているとのことだったので、苦しんでいる人と寄り添っているのだということを強調した方が理解を得やすいと思う。

委員長：一つの問題は、普通この手の協働提案書には団体概要書も付いていることが多い。

申請団体の負担になるかと思うが、団体概要書を付けて欲しかった。

委員：食器のレンタルはどういう所でPRし、どこをターゲットにしているのか。

風車：ワーカーズコレクティブというのは、生活クラブ生協から生まれた団体。地域にある課題を事業にして、出資・経営・労働を皆で行うという民主的な事業を興す団体。関連団体が千葉県内に9団体あり、そこで使ってもらっている。また、リユース食器については山梨県にスペースという本部があるのだが、そのネットワークを使いながら貸し出しを行っている。去年は千葉国体でも使っていた。引きこもりの方も一緒に仕事をしている。

委員長：団体概要書があるとそういうこともわかった。

事務局：団体の概要書について。市民協働の提案事業の場合、申請いただく場合事前に団体登録が必要。登録要件を満たした団体が申請しているので、次回の会議以降については、登録団体の概要を添付させていただく。

委員長：財政規模や、会のビジョンだけでもわかれば審査しやすくなる。

委員：教育評論家の方についてどのくらい調べているのか。

風車：今まで10年以上、不登校の親の会で一緒に活動されてきた方。考え方等もよく知っている講師。

委員：オウム関係の話もしていたと記憶している。

風車：している。オウムを擁護したというのは事実ではない。「オウム現象の解説」という本の中で、評価していると捉えることが出来る表現が見られるということでネットで叩かれたことがある。本人に直接確認したのだが、オウムがやったことを評価するという趣旨ではなく、宗教現象の在り方として、分析したとのこと。やったことを良しとしているというのは誤解。私達自身は良く知っているし、ネットで書かれていることが正しいことではない。この問題に関しては世間の風評を気にせず、自分達の考えで良いと思ったので依頼した。

(2) その他

事務局：第3回委員会の議題及び日程について。平成24年度の行政提案型事業のテーマの調整と選定、平成23年度の基調講演、事業報告会をどのように行うかについて議論していただく予定。行政提案型のテーマ事業の調整が整うのが、11月頃を想定している為、同時期の開催を予定している。併せてまちづくり協議会の結成及び事業申請が整った所で適宜、申請事業の採択にかかわる会議開催の日程等を調整させていただければと思っている。

なお、予定外の会議開催になるが、先般、市としては小学校区単位でまちづくり協議会を進めているが、複数の小学校区を含んだ地域まちづくり協議会の認証申請が新たに提出された。そこで、委員各位に意見を聴く機会を設けさせていただきたい。まちづくり協議会の団体の認証については、要件を満たしていれば認証と言うことになるが、今回の申請団体は複数の小学校区で構成されている。まちづくり協議会の認証に関わる要件の全てを満たす必要があるのだが、市民協働委員会の意見を聞くことも地域まちづくり協議会の認証等に関する要綱に定められている。今後会議の場を新たに設けたいと考えている。今回の会議の結果を受け、市民協働事業の採択の結果通知を出す必要もあり、その為の事務関係もあるため、委員長、副委員長とも調整する予定だが7月位になるのではないかとと思っている。よろしくをお願いしたい。

委員長：報告会の相談を予定していたが、まちづくり協議会の申請について判断に迷っている事案があるので、委員会の意見を聞きたい。それについては7月頃になる。年間スケジュールからいうと臨時のものになるがよろしくをお願いしたいということだった。

委員：7月と言うことであれば、都合のつかない日でも聞いておくのはどうか。

事務局：概ねこの頃が良いというのを伺いたい。

委員長：7月24日の午後はいかがか。

委員全員異議なし。

事務局：では、7月24日の午後と言うことで予定を組ませていただく。

委員長：採点に入るので、採点に変更のある委員は事務局に提出していただきたい。

(3) 市民協働事業(市民提案型)の評価及び意見調整について(非公開)

事務局：結果を事務局でまとめ、会議録と併せて委員長、副委員長に確認していただく。最終的にそれを持って市へ意見として提出することになる。

委員長：市長に意見するという事なので、文書にするにあたって事務局が整理した結果を、私及び副委員長が確認し、意見具申するということにさせていただきたい。議事録署名人は、木田川委員に願います。これで会議はすべて終了する。

平成23年7月13日(水)

委員長	名和田	是彦
副委員長	浅野	訓子
議事録署名人	木田川	直子